

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における
継続的な地域貢献活動の基盤づくり

小田 慶喜¹⁾

梅本 静香¹⁾

三浦 敏弘²⁾

Research of the Contribution to the Community by Student
Volunteer Activities

— Students' Extracurricular Activities for the Local Society as a
Contribution —

Yoshinobu ODA
Shizuka UMEMOTO
Toshihiro MIURA

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における 継続的な地域貢献活動の基盤づくり

小田 慶喜¹⁾

梅本 静香¹⁾

三浦 敏弘²⁾

Research of the Contribution to the Community by Student Volunteer Activities

—Students' Extracurricular Activities for the Local Society as a Contribution —

Yoshinobu ODA¹⁾

Shizuka UMEMOTO¹⁾

Toshihiro MIURA²⁾

Abstract

The University has many diverse opportunities for both students and staff to get involved within the University and the local community.

We can recognize students to be a part of human resources of the University which we can offer to the local society. These volunteer activities should be regarded as valuable, and as a contribution to the local society. Students learn social skills and responsibility, team work through volunteer activities for local society.

Himeji Dokkyo University started volunteer activity project in local

3) 姫路獨協大学医療保健学部
〒670-8524 兵庫県姫路市上大野7-2-1
Faculty of Health care sciences, Himeji
Dokkyo University
7-2-1 Kamiohno, Himeji- City, Hyogo 670-
8524, JAPAN.

2) 関西大学人間健康学部
〒590-8515 大阪府堺市堺区香ヶ丘町
1-11-1
Faculty of Health and Well-being, Kansai
University
1-11-Kaorigaoka-cho, Sakai-ku, Sakai-shi,
Osaka 590-8515, JAPAN.

society. It is clear that students are able to learn social skills through many volunteer projects.

I. 緒言

学生に対する大学教育の一環として、地域資源を活用したまちの活性化施策のあり方を学生の活動を中心に理解する様々な方法が考えられている。^{1) 2) 3) 4)}時代は、保守的かつ閉鎖的環境下で社会性の乏しい学生を育てるこれまでの大学の在り方では、地域住民に不安感を与え大学の存在価値が問われる時代に変化してきている。社会は、学生を一人前の人間となる前の青年期におけるモラトリアム⁵⁾状態として受け入れる心理的社会的余裕も無い時代へと変化しており、学問の享受だけに頼らない、時代や地域に対応することのできる学生の育成が求められている。

本研究において提示した姫路獨協大学は、初代学長須田勇の「健康科学大学院」構想を基盤として、1987年に「姫路市民」、「姫路市」、「獨協学園」の三者が官学協働の「公私協力方式」で設置した日本初の公私協力による大学であり、その後全国各地にできた公設民営大学のモデル校でもあり、地域貢献の重要性を学生に伝えなければならない必然性を担っている⁶⁾。獨協学園は、1881年ドイツ学術の啓蒙団体である獨逸学協会が設立、1883年獨逸学協会学校として創立され、西周、桂太郎、加藤弘之らによってその礎が育まれた。獨協大学、獨協医科大学、姫路獨協大学、獨協医科大学附属看護専門学校、獨協高等学校・中学校、獨協埼玉高等学校・中学校より構成され、130年の歴史を有している。⁷⁾

姫路獨協大学開学以来、須田勇初代学長は学生の社会奉仕を兼ねた地域貢献の理念をもとに、開学当初より学部として設置された学生の教養教育を担当する一般教育部は、学生の教養教育の中に地域

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり
貢献を取り入れ、姫路市における有意義な学生生活の過ごし方やその取り組みを伝える役目を担っていた。その具体例として、大学が中心となり、体力測定・健康診断を兼ねた巡回検診バスの計画が立てられ、姫路市に対しても予算計上が検討された。結果的には、予算面および担当者の負担から時期尚早とみなされ、実現には至らなかったが、健康科学領域の教養科目を設置し、「公開講座」や「公開学習会」などの取り組みにおいて地域貢献を充実させ、将来の関連学部・学科の準備を継続することとなり、現在、医療保健学部、薬学部の開設に至っている。

2006年の医療保健学部開設にともない設置された医療保健学部作業療法学科は、学部設立時より単に作業療法士の育成だけではなく、健康科学という領域においても地域貢献できる人材の育成を目指している。そのため、1年次生より姫路市における医療・保健・福祉関連施設における活動に積極的に学生を参加させる授業形態を取り入れ、学生の地域貢献活動の実践を試みている。「地域連携・貢献活動」、「臨床技術学実習」、「現場体験実習」などはそのために設置された授業科目でもある。

これまで実施された地域連携・貢献活動の領域は、地域の医療保健機関、福祉施設、自治体・教育委員会、各種障がい者団体等での活動を中心として、地域の祭や障がい者スポーツへの参加も含め、学生の活動を活性化する取り組みを多く実践してきた。学生は医療・保健・福祉に関連する現場での地域連携・貢献活動を通して、積極的な学習行動を体得するとともに、身近な地域における医療・保健・福祉の課題を捉え、さらに多様な人間関係を構築する社会的経験を蓄積することができるが、学年が進行するにつれ、地域貢献活動という領域から離れてしまう傾向にあることも次の課題として問題提起されている。

一方、受け入れる側としても毎回未熟な状態で学生を受け入れ、

現場において時間をかけて育て上げた経験を蓄積した能力ある学生が、大学における長期実習等で活動現場を離れることとなり、再度新しい学生を育てる努力に専念しなければならない矛盾を再考する状況にある。

本研究においては、姫路獨協大学が開学以来取り組んできた学生による地域貢献活動を基本として、医療保健学部学生の地域貢献活動である「地域連携・貢献活動」、「臨床技術学実習」「現場体験実習」などで構築された各施設および活動内容を地域資源と考え、学生を中心とした姫路市の活性化に貢献できる活動の効率化をはかり、継続的な地域貢献活動が可能な基盤づくりを目的とする。

Ⅱ. 学生の地域貢献活動を促す取り組み

姫路獨協大学における学生の地域貢献活動の取り組みは、「外国語学部」、「法学部」、「経済情報学部」における取り組みが基本となり、「医療保健学部」、「薬学部」がより専門的領域において、地域貢献を担うように活動が拡大させてきている。開学以来、姫路獨協大学が取り組んでいる学生の地域貢献活動を促す取り組みを以下にまとめる。

(1) 入学前教育

新入生に対する事前教育取り組みとしての入学前教育（プレスチューデント・プログラム）を積極的に導入することにより、学生の意識改革を促し教育の充実化を図るために必要な取り組みである。

入学前から学生とのコミュニケーションをはかり、大学で学ぶ目的を確認し、入学後の意欲的な大学生活を喚起することにより、より充実した学生生活を送ることのできる可能性を理解させる。そのためには大学生として学ぶ地域環境としての姫路を知ること

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

から始め、大学で学ぶ内容を様々な手法で紹介し、大学で学ぶ内容に興味を持たせることが必要となる。大学で学ぶことの意義を考えさせ体験させることにより、入学後の学習意欲の向上と入学後の速やかな学業への専念できる状態を育む努力を重ねている。

入学前教育において姫路獨協大学の姿勢（アドミッションポリシー）を示し、全学共通科目を中心とした「教養豊かな学生の教育」につながる重要な取り組みとして理解する努力を重ねている。特に、獨協学園の中興の祖である天野貞祐の「学問を通じての人間形成」ということを大学の理念として掲げ、この理念を継承し、良き人間、良き市民を育成することに力を注いでいる。⁸⁾ 地域の人たちと積極的にかかわり、積極的にコミュニケーションを取り、地域と共に学生を育てる取り組みの重要性を学生と共に考える時間を持つように企画されている。

(2) 地域政策と地域貢献

この講義は、姫路市、姫路市商工会議所、姫路市のNPO法人等、多くの姫路獨協大学を支援していただいている方々の協力を得て実施している。姫路市長をはじめとする姫路市役所の幹部職員、姫路市を中心としたトップ企業の役員、そしてNPO法人「姫路市コンベンションサポート」のメンバーらを中心に講義の担当を依頼し、姫路における地域政策・地域貢献について学ぶ機会を構築している。行政、企業、民間団体という三者の視点から、姫路地域のあり方を学び、学生がどのように地域に対して貢献できるのかを考える基礎を培う取り組みでもある。講義内容は、姫路市に関わる多くの人に参加を依頼するため、各年度において講義内容が再構成されるが、実施された具体的な講義例を表1に示す。

この講義の中心は行政の首長である姫路市長が直に学生に対して講義を担当する部分である。学生にとっては、学んでいる環境

身体運動文化論攷

における地域貢献等のあり方を首長より直接確認できるよい機会となっている。

表 1. 「地域政策と地域貢献」における講義例

【地域政策と地域貢献・授業計画】	
1	特別講義(地域政策と地域貢献)について
2	NPO概論
3	NPOで仕事する「地域と関わる」を仕事にする
4	大学が取り組む姫路市への貢献
5	企業の社会的責任(CSR)と求める人物像
6	国際観光都市姫路をめざして
7	学生が取り組む貢献を考える
8	中核都市姫路のめざすまちづくり
9	魅力ある姫路の教育をめざして
10	生涯現役社会の実現をめざして
11	夢園と協働のまちづくりをめざして
12	鉄道高架と拠点都市の整備をめざして
13	農林水産業の振興をめざして
14	循環型社会の形成をめざして
15	国際観光・コンベンション都市をめざして

学生の比較的理解できる地域貢献活動として、各種スポーツイベントの支援活動がある。獨協学園の中興の祖である天野は、1973年に野球殿堂入りをしており、大学生としてのスポーツと学生のかかわり、あるいはスポーツと人生を考えるよいテーマを提供している。獨協学園においては、学業だけでなくスポーツを通じた人間教育も評価を受けている。スポーツの範疇を拡大し、野外教育や伝統文化を含め、姫路の多くの祭を中心とした伝統文化の継承者、あるいはスポーツ文化の指導者としてのかかわり方等を学ぶ機会を積極的に導入するように心がけている。図1に、講義において紹介したスポーツボランティアの取り組みを示した。



図1. スポーツボランティアの取り組み例

(3) 野外教育文化論

野外文化教育学会は、学会の基本理念と活動内容について、学校中心の教育が見直され、学校外での体験学習活動（体験活動）を通じた「人づくり」が重要な課題となっていることを説いている。野外文化教育が学校内の教育と並立して進められることにより、社会性や人間性を豊かにする「人づくり」にとって重要な要素について、体験的学習を中心とする総合的な学習を持続的に推進することにより深めることが出来ると謳っている。青少年が"生きる力"や"感じる心"を培うために最も適している野外文化教育としての体験学習活動は、①自然体験、②農作業体験、③生活体験、④没我的遊び体験、⑤集团的活動能力の向上体験、⑥問題解決の困難に対する克服体験などが多く考えられている。社会において、

身体運動文化論攷

子どもから老人までの異年齢の人々が協同体験することは、子どもにとっては見習い体験の“鍛錬”で、古くから日本の文化として培われてきており、子どもたちが思いやる心、協力する心、感動する心や信頼や絆を培い、生活能力や防衛体力、社会性、判断力、環境認識等を高め、各自がそれぞれの能力の限界や独自の可能性を発見するのに最も効果的であることが科学的に明らかになっている。⁹⁾

こうした観点から、これからの教育にとって最も重要な分野である野外文化教育について学ぶ機会の提供を取り入れている。

導入として、姫路獨協大学周辺の四季の変化における自然環境、そこに生活する人々とのかかわりを考えていくように構成されている。自然環境と深く関わって生活している地域を取り上げ、自然環境に関係する生活、産業、伝統芸能、民話等のテーマを中心にフィールドワークを取り入れた学生参加形式の授業を実施し、教室内での授業と、教室外での取り組みを実践している。「地域や自然の環境とふれあう」、「地域や自然の環境を知る」、「地域や自然の環境へ行動する」このような働きかけを、積極的に実践することができるように働きかけている。特に、相生ペーロン祭や地元の祭への参加を促し、学生を受け入れてもらうことの出来る地域とのかかわり方を学ぶ機会を提供している。講義内容は、各年度において再構成されるが、実施された具体的な講義例を表2に示す。

表2. 「野外教育文化論」における講義例

【野外教育文化論・授業計画】	
1	野外教育文化を理解するために
2	地域と自然のかかわりについて
3	祭りと自然のかかわり
4	身近な自然
5	学内の自然
6	野外教育と自然体験活動
7	壱山の自然と生活 私たちの周りの自然を知ろう
8	緑の回廊自然歩道を知る
9	自然観を育てる野外教育の展開
10	自然と関わる生活を考える
11	自然を調べる
12	自然を活用した行事
13	地域と自然のかかわりについて
14	相生ペーロン祭りに参加してみる
15	姫路の祭りに参加してみる



図2. 祭に参加し地域を理解する

相生ペーロン祭りや地元の祭りは、祭り当日だけのかかわりでは、伝統的に行行事に受け入れてもらうことの出来ない状況があることを理解するよい機会でもある。大学には姫路市以外の地域から入学する学生も多く、住まいを賃借して生活する学生も多い。受け入れを了承してもらう施設や組織には、準備段階からの受け入れをお願いし、学生には伝統文化を継承するには、日常生活におけるお互いの理解が重要であることを学ぶようにしている。図2は、地域のいろいろな祭りに参加する機会を生かし体験を地域貢献に生かす取り組みを示したものである。

(4) スポーツマネジメント

野外文化論において指摘したように、社会問題や教育問題が山積する現代社会において、スポーツが持つ社会的貢献度は一層高くなってきている。一人ひとりが豊かな人生を過ごすためにも、地域社会が活性化するためにも、スポーツの持つ効果は多大なものであり、多くの効果が期待されてもいる。スポーツの持つ地域社会への貢献を活性化するためには、地域に質の高いスポーツクラブがたくさん存在し活動することが不可欠であるが、スポーツクラブを運営するための研修講座は、まだまだ少ない状況である。スポーツライフを支援するには、健全なクラブ運営が必要と考え、姫路市に事務局を置く特定非営利活動法人（NPO）スポーツクラブエストレラの協力を得て、クラブマネジメントに関する研修

身体運動文化論攷

を企画した。

その内容として、①既存のスポーツクラブの運営に関して、スポーツ組織マネジメントの知識・スキル・センスの育成及びスタッフ資質向上に関する研修の機会を提供。②既存のクラブ間のネットワーク作りに貢献。③新規スポーツクラブ立ち上げに関する、情報提供及びスタッフ養成の機会を提供。などを目的とし、講義の基本方針を①講座は、講義と実習によって構成する。②講義は、各自の「事業計画書」を作成し、授業終了時にその事業計画

表 3. スポーツマネジメンツの実施例

NP0 協入スポーツクラブエストレラ
「2007 年度 スポーツクラブマネジメント講座」 実施要項

1. 基本方針

様々な社会問題や教育問題が山積する現状、スポーツが持つ社会的価値は一番高くなってきていると感じます。一人ひとりが多岐的な人生を過ごすに、スポーツの持つ価値は多大なものであります。そのためには、地域に根ざしたスポーツクラブがたくらみ存在することが不可欠です。しかしながら、コーチングの確保ははたらくともありますが、スポーツクラブを運営するための研修講座は、最近増え始めたとはいえ、まだまだ少ない状況です。スポーツライフを支援するため、健全なクラブ運営が必要で、この状況を踏まえ、このたびエストレラでは、このクラブマネジメントに関する研修の機会を提供したいと思っております。
2. 目的
 - (1) 既存のスポーツクラブの運営に関して、スポーツ組織マネジメントの知識・スキル・センスの育成及びスタッフ資質向上に関する研修の機会を提供します。
 - (2) 既存のクラブ間のネットワーク作りを支援します。
 - (3) 新規スポーツクラブ立ち上げに関する、情報提供及びスタッフ養成の機会を提供します。
3. 基本方針
 - (1) 講座は、講座 15 単位 (1 講座 90 分) と実習 (必須も単位と講義実習) によって構成します。
 - (2) 講座は、各自の「事業計画書」を作成してもらい、年度末にその事業計画に沿ってプレゼンテーションをおこないます。事務局は作成にあたり、コンサルタント機能を果たします。
 - (3) 本講座を履修することをもって終了とし、終了時にはエストレラより終了証を授与します。
4. 各プログラム

実施月日	講座内容	実 習
6 月 17 日	開講式・約 10 分・「クラブのイメージ」作成①	交流会①
7 月 1 日	マーケット分析②	
7 月 22 日	ユーズとプログラム③	19→見学② 夜 16→実習 (B25)
8 月 2 日	21→「クラブのイメージ」作成①	クラブ訪問
9 月 23 日	イベント計画・プロモート④	
10 月 14 日	ボランティアマネジメント⑤	イベント実習⑤ (108)
10 月 28 日	22→「事業計画書」作成⑥	
11 月 4 日	23→「クラブのイメージ」作成①	
11 月 18 日	収支計画とスポンサーシップ⑦	
12 月 2 日	24→「事業計画書」作成⑥	緊急対応訓練⑧及び AED 講習⑧
1 月 12・13 日	プレゼンテーション発表会⑨	
6 月 15 日 (予定)	修業計画発表会⑩	
2 月 3 日	25→ボランティア実習⑥	
3 月 3 日	閉講式・報告式	交流会②

※①～⑩は、必須実習です。

に沿ってプレゼンテーションをおこなう。事務局は作成にあたり、コンサルタント機能を果たす。③全講座を履修することをもって終了とし、修了者には協力を得ているエストレラより終了証を授与する。表 3 に、スポーツマネジメンツの実施例を示した。

現在の大学教育においては、資格に関する講座が注目を集めているが、講義科目開設当初は学生の理解が及ばず、講座への参加が皆無であった。学生は漠然と資格の必要性を感じてはいるが、資格取得のために時間を割き努力することの必要性を認識していない傾向にある。しかし、地域のスポーツ指導者の参加が多数あり、学生と社会人の意識の違いを理解するに至った。本来であれば、

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

社会人と学生が共に学ぶ場の提供が理想的であるが、現行においては、より学生に理解を促すためにスポーツ産業論的要素を含んだ講義へと変化させている。

(5) アダプテッド・スポーツ

アダプテッド・スポーツ (Adapted Sports) とは、スポーツのルールや用具を実践者の「障がいの種類や程度に合わせたスポーツ＝その場その場に適応させるスポーツ」という意味である。スポーツは一部特化したプロスポーツだけが注目を集めているが、万人が楽しむ権利を持っており、創意工夫をして多くの人たちが楽しむ努力を惜しんではならない。

障がい者のスポーツも、「目が見えない」、「耳が聞こえない」、「車いすの利用」といった状況を、用具やルールを工夫することで、みんな一緒に楽しむ努力をすることが基本となる。障がい者のスポーツだけでなく、高齢者のスポーツ、こどものスポーツなども、この領域に含めて考えることが可能である。日本体育学会の専門部会には、アダプテッド・スポーツ科学専門分科会の設置が承認されており、アダプテッド・スポーツは、リハビリテーションの延長という考え方だけではなく、健常者や障がい者も含めた全ての人たちのスポーツ振興を担っている。市民レベルの楽しむスポーツから、パラリンピックで競われるスポーツまで、体育学、教育学、社会学、心理学、生理学、バイオメカニクス、工学、医学、その他の分野も含めて考える必要がある。

これらの考え方を基礎にして、人に優しい町づくり、障がいに対する理解や障がい者の雇用についても考える必要がある。日常生活においてスポーツを支援する場合、スポーツ医学に関する知識が重要な役割を果たし、健康とはどのような状態なのか、また、スポーツ活動や運動によってどのような健康への効果がもたらさ

れるのかなど、スポーツ活動と健康（QOL）との関わりについて知識を持つ必要がある。また、世代、年代別の健康とスポーツ活動・運動についての考え方を理解し、実践できるようになることが重要である。

表 4. 「アダプテッド・スポーツ」における講義例

【アダプテッド・スポーツ・授業計画】	
1	セラピューティック・レクリエーション 1
2	セラピューティック・レクリエーション 2
3	プロジェクトアドベンチャー 1
4	プロジェクトアドベンチャー 2
5	ネイチャーゲーム 1
6	ネイチャーゲーム 2
7	シッティングバレーボール 1
8	シッティングバレーボール 2
9	フライングディスク 1
10	フライングディスク 2
11	ゴールボール 1
12	ゴールボール 2
13	スポーツチャンバラ 1
14	スポーツチャンバラ 2
15	車いすマラソン



図 3. アダプテッド・スポーツの体験

アダプテッド・スポーツを開講し、地域貢献活動としてスポーツボランティアに参加した場合、指導技術や知識に関する指導を実施できる体制を組んでいる。表 4 および図 3 に、「アダプテッド・スポーツ」における講義例を示した。

Ⅲ. 医療保健学部学生の地域貢献活動の取り組み

これまでに示したように、姫路獨協大学における学生の地域貢献活動の取り組みは、「外国語学部」、「法学部」、「経済情報学部」の学生を対象として、基礎となる部分については、運営できる状況に構築されている。2006 年の医療保健学部開設にともない設置された医療保健学部作業療法学科は、学部設立時より単に作業療法士の育成だけではなく、健康科学という領域においても地域貢献できる人材の育成を目指している。そのため、1 年次生より姫路における医療・

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

保健・福祉関連施設における活動に積極的に学生を参加させる授業形態を取り入れ、学生の地域貢献活動の実践を試みている。「地域連携・貢献活動」、「臨床技術学実習」、「現場体験実習」などはそのために設置された授業科目でもある。

活動中の保険については、大学において実習に適応する保険に加入し、不測の事態にできるだけ対応できるようにしている。

(1) 臨床技術実習Ⅰ・Ⅱにおける取り組み

臨床技術学実習Ⅰは、「地域現場体験実習」に向けて臨床現場にて必要とされる学生の技能と態度を体得することを目的としている。設定された状況（課題）で、実習生としての適切な立ち振る舞いについて、ロールプレイでの学習を通して、①自分の行動パターンを客観的に振り返る。②自分の行動パターンについての、他者からの意見を受け入れる。③自己分析、他者からのフィードバックの結果、実習において適切な行動へ変容することができる。などの技能・態度を体得する。プレゼンテーションスキルでは、情報・考え・感想などを正確に効果的に伝達するための態度、技術（内容・伝え方）などについて習得することを目標とする。

初年次生を対象として、地域貢献活動にかかわるための基礎知識を習得するために、入学年度において実施するように設定されている。

臨床技術学実習Ⅱは、臨床技術学実習Ⅰにて取得した技術をもとに、作業療法対象者に対して、安全で効果的な作業療法介入を実施するための技術・態度、指導方法について学ぶことを目的としている。設定された状況（課題）で、指導者としての適切な立ち居振る舞いについて、ロールプレイでの学習を通して、他者からの意見を受け入れつつ、適切に他者を指導する技能・態度等を体得することを目標とする。

身体運動文化論攷

初年次生を迎え入れた2年次生を中心に、初年次生に対して各自が体験してきた経験を生かし、地域貢献活動にかかわるための基礎知識を実践的に活用できるための知識の展開が出来るように設定されている。

表5. 臨床技術学実習Ⅰ・Ⅱの実施例

	臨床技術学実習Ⅰ（初年次生）	臨床技術学実習Ⅱ（2年次生）
1	オリエンテーション (地域現場体験実習を含む説明)	オリエンテーション (地域現場体験実習を含む説明)
2	接遇スキルグループワーク1	接遇スキルグループワーク (学生指導)
3	コミュニケーション特別講義	コミュニケーション特別講義
4	接遇スキル実技プレゼンテーション	接遇スキル実技発表
5	接遇スキルグループワーク2	接遇スキルグループワーク (学生指導)
6	プレゼンテーション講座・資料作成	プレゼンテーション講座・資料作成
7	接遇スキル実技試験 プレゼン資料作成・発表練習	接遇スキル実技試験 (担当学生の評価および対応)
8	プレゼンテーションスキル技術試験	プレゼンテーションスキル技術試験 (学生指導)
9	地域貢献活動に関するミーティング	地域貢献活動に関するミーティング
10	地域貢献活動に関するミーティング	地域貢献活動に関するミーティング
11	実習前セミナー	実習前セミナー
12	地域現場体験実習	地域現場体験実習支援
13	地域現場体験実習後セミナー	地域現場体験実習セミナー (学生指導)

臨床技術学実習Ⅰ・Ⅱは、初年次生と2年次生がお互い協力をしてすすめるように設定されており、責任のある地域貢献活動のあり方を考えることの出来るように内容が設定されている。表5に、具体的な取り組み例を示した。

(2) 臨床技術実習Ⅰ・Ⅱにおける接遇スキルトレーニングの内容

臨床技術学実習Ⅰ・Ⅱにおいて、学生は学外における地域貢献活動に必要とされる技能・態度を体得することを目的として相互に経験を積むことを繰り返し指導するように設定されている。

- ①自分の行動パターン（振る舞い、対人技能）を客観的に振り返る。
- ②自分の行動パターンについての、他者からの意見を受け入れる。
- ③自己分析、他者からのフィードバックの結果、実習において適切な行動へ変容することができる。

●接遇スキル実技発表：グループワークでトレーニングの成果を、

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

表 6. 接遇スキルトレーニングの実施例 1

課題 1	実習施設との電話のやり取りを設定し、対応を学習する。
学習目標	①現場で忙しい実習指導者を気遣う配慮ができる。 ②電話での適切な対応ができる（挨拶・言葉使い）。 ③相手にわかりやすく情報を伝え、必要な情報を相手から引き出すことができる。
場面設定	実習施設との電話をかけ、訪問の予定を調整する。
学生	あなたは、姫路福祉センターに〇月〇日より1週間、地域現場体験実習に行きます。そのための事前訪問のためのアポイントメントをとる目的で実習指導者へ電話をしてください。実習指導者は、小田先生(リハビリテーション課)です。電話をすると、まず福祉センター事務の太田さんが電話に出られます。
事務受付	まず「姫路福祉センターの太田です」と名前だけを書いて下さい。その後、学生からの申し出に、最低限の対応をして下さい。
指導者	まず「私は小田です」と名前だけを書いて下さい。 その後、学生が会話を展開してきたら、最低限の返答だけをして下さい。
評価	①電話の目的、氏名・所属（学校名・学年）を正しく伝えているか。 ②必要な情報を漏れなく収集できているか 必要に応じて復唱しているか、メモの準備などできているか。 ③電話へのお礼・実習指導に対するお願いを適切に伝えているか。

学生の前でプレゼンテーションする。学生相互に高め合うようなフィードバックを期待し、プレゼンテーションを行う学生は、フィードバックの意見を参考に、実習において適切な行動へ変容するよう努力する。

- 実習スキルトレーニング試験：1年次生は実習学生役、2年生は施設利用者・指導者の役を演じ、1年生の技術・態度を評価する。なお2年生の技術・態度も評価する。試験において不可となった場合、追加課題及び再試験を実施し、地域貢献活動時の服装等の身だしなみについても理解させる。

表6、表7、表8、表9にそれぞれ臨床技術実習Ⅰ・Ⅱにおける接遇スキルトレーニングの実施例を示した。

身体運動文化論攷

表 7. 接遇スキルトレーニングの実施例 2

課題 2	実習施設や地域貢献現場における挨拶を学習する。
学習目標	①印象のよい表情、態度、服装、挨拶、言葉遣い、立ち振る舞いができる。 ②主体的な実習に取り組む意思を露骨で示すことができる。
場面設定	実習施設や地域貢献現場における初日の対応を学ぶ。
学生	姫府福祉センターでの、地域現場体験実習、初日の朝です。まずは、施設の入口窓口で挨拶をし、次に実習指導者と会い、挨拶、今日の予定などについて確認します。
入口窓口	学生からの申し出に、最低限の対応をして下さい。
指導者	まず「私は小田です」と名前だけを覚えて下さい。その後、学生が会話を展開してきたら、最低限の返答だけをして下さい。
評価	①受付にて、適切なやり取りができているか。 ②実習に対する意気込みを伝えることができているか。 ③実習予定の確認など自分がすべきことを能動的に行っているか。

表 8. 接遇スキルトレーニングの実施例 3

課題 3	地域貢献活動中の利用者との談話を学習する。
学習目標	①施設利用者と自然なコミュニケーションを自分からできる。 ②対象者に合わせて会話を展開できる。 ③対象者が安心できるかわり方を配慮できる。
場面設定	実習施設や地域貢献現場における利用者との対応を学ぶ。
学生	実習指導者の先生から、「積極的に利用者さんと関わってみてください」と言われ、活動室で、ぼんやりと外を眺めている小田さんと関わってみようと思います。小田さんの趣味は、(折り紙・将棋・その他、自由に設定可能)です。その趣味を使って一緒に楽しみたいと学生は考えています。
利用者	小田さんは、80 才の方です。人と接することが嫌いではありませんが、自分から見知らぬ人と関わるような感じではありません。学生が話しかけてきたら、普通に受け答えをしてください。
評価	①はじめの関わり方、タイミング、自己紹介の内容は適切か。 ②対象者を中心にしたやり取りができているか、一方的な話になっていないか ③対象者の情緒(不安等)、身体的な安全性への配慮をしているか。

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

表9. 接遇スキルトレーニングの実施例4

議題4	失敗したときの対応について学習する。
学習目標	①社会的礼儀を実践することができる。 ②心より謝り、次の行動を起こすことができる。
場面設定	地域貢献活動中に失敗したときの対応について学ぶ。
学生	利用者として作品作りを行っていた時、廊下で卒業の道具を床に落として謝ってしまいました。
実習指導者	学生の対応（謝罪・謝罪）が適切であれば、「次回より気をつけなさい」といった指導を学生に行ってください。
評価	①適切に指導者への報告ができる。 ②謝罪の気持ちを言葉や表情・態度で伝えることができるか。 ③今後、学生がすべきことについて適切に述べることができる。

表10. 実習時の態度に関する共通項目チェック例

【身だしなみ】
全体の印象が不快感がなく、清潔感がある。
服装は、華美でないこと。（通学時、実習時ともに）
服装（白衣）は洗濯済みで、清潔である。
ボタンをきちんととめ、名札を着用。
髪型は、利用者、スタッフにとって抵抗感がないもの。（長髪の場合はくくる）
ヒゲ、爪などは手入れされている。（爪：対象者に触れた時に爪痕がつかない）
華やかな化粧、マニキュアはしない（淡色で目立たないこと）
履物は動きやすく清潔感があり、足にフィットしている。（サンダルは不可）
【言葉遣い・表情】
対象者に好感がもたれるような話し方（表情に明るさや元気があがるか）
対象者に適した声の大きさである。（高齢者にも聞こえる／小児が驚くことがない）
対象者にわかりやすい話し方をしているか（内容の整理、スピードなど）
対象者への敬意が感じられる言葉遣い（適切な敬語）、正しい言葉づかいであるか。
対象者との距離は適切か
相手の状況（都合や時間）や気持ち（感情）に配慮・気遣いして話しかけているか
【振る舞い・歩き方】
だらしない振る舞いをしない。
立ち方：背筋を伸ばして胸を張る。あごをすこし引き、前方を見る。両足を揃えかかとをつけ、つま先をやや開く。指を伸ばして揃え、スボンの縫い目につける（もしくは前で組む）。
座り方：状況に応じて対応できる。
歩き方：ガラガラとした歩き方をしない。
お辞儀：丁寧なお辞儀ができているか。場面に応じたお辞儀を使い分けができているか
面接試験時の態度・教員とのやりとりは適切か

地域貢献活動に参加する学生に対し実施される接遇スキルトレーニングについて、表10に示すような「身だしなみ」、「言葉遣い・表情」、「振る舞い・歩き方」などについて学生間で共通項目に関するチェック機能を働かせ、お互い指摘し合い注意喚起を促すように心がけている。

日本が抱える高齢者社会の問題、作業療法士としての将来の職場を勘案した場合、学生たちが今後地域貢献活動において活動する領域は、高齢者を対象とする領域が多数含まれることが想定される。高齢者社会や高齢者施設における高齢者を対象としたコミュニケーションは、経験の不足する大学生の最も難しい領域である。日常において新聞投稿やニュースなどに積極的に触れるように努力し、高齢者の考えを理解する努力が必要となる。学生に対しては、図4に示すような高齢者の心理状況や精神状況を把握する努力を

心がけている。特に戦争体験者に対する、戦争に関する体験を想像させるような若者のファッションについては注意を促しており、自由と他者への影響を考慮するように指導がなされている。日常生活レベルにおける情報収集の習慣化を強調し、いろいろな情報源を持つことの重要性、気づく感性を育てることに注意が払われている。

図4. 高齢者社会の把握



(3) 現場体験実習における取り組み

地域現場体験実習は、作業療法士養成カリキュラムの早い段階で医療保健福祉に関連する臨床現場を体験することにより、将来作業療法士となる学生の学業への動機を高めこと、幅広い視点で医療保健福祉をとらえることができる能力を習得すること、対象者のニーズや生活状況、社会的背景を共感的に理解すること、現場で求められる医療保健福祉従事者としての資質と適性（態度・習慣・倫理）について体得することを目的に実施している。初年次学生にとっては、地域貢献活動を重点的、集中的に体験する機会でもある。現場体験実習は、夏期休業期間中の1週間を利用して実施し、その後セミナーにおいて情報の共有を促す努力をしている。現場体験実習の体験の現場は、障がい児・者施設、高齢者施設、保健施設等である。学外実習は、実習施設職員、施設利用

者など多くの人々によって支えられている実習であり、その思いを大切に臨むことがなにより大切であると認識する努力がなされている。実習前に、学生に基本的な身につけることとして以下のことが伝えられる努力がなされている。

●この実習での“学び方”のキーワード

① Learning through doing

行動・経験を通し学ぶ

実際に自分で動いてみないとわからないこと、“自分でできること・できないこと”など、自分の能力を知る。

体験を通して、感じる、考える、自分の技術を試す。

②主体的な学び

実習に向けて主体的に準備する。自ら目標を設定し自己評価する。

●実習のプロセス (PDCA サイクル)

1. Plan (計画): 事前に実習施設を調べ、経験できることを予測し、自己目標を設定する。(実習前セミナーで報告)
2. Do (実施・実行): 自己目標達成できるよう現場で能動的に行動する
3. Check (評価): 目標に対する自己評価、実習指導者からの評価を受け入れる
4. Act (処置・改善): 達成できたこと、できなかったこと、今後の実習で目標とすべきことを整理し、実習後セミナーで報告する。

表 11 に、現場体験実習の実施例を示した。

表 11. 現場体験実習の実施例

内容	注意事項
1. オペレーション	実習の概要について説明
2. 診断スキルトレーニング グループワーク1	グループ別に2年生が指導
3. 診断スキルトレーニング グループワーク2	グループ別に3年生が指導
4. 診断スキル実性プレゼンテーション	
5. 診断スキルトレーニング グループワーク3	実習施設記録簿 個人資料の配布 グループ別に2年生が指導 訪問後、実習報告の作成
6. 実習サマリーセッション プレゼンテーション課題・資料作成	
7. 事前訪問	事前訪問を通して、施設の概要を把握し、実習に必要な準備を確認しておくこと。 また実習の目標を具体化する(機会によっては実習指導者と相談)
8. 診断スキル実性試験 プレゼン資料作成 発表練習	試験は、実習時の施設で受験のこと
9. プレゼンテーションスキル試験	原則として、パワーポイント等、パソコンを用いたプレゼンテーションを行うこと。
10. 実習後セミナー 各自オープンキャンパス	実習後セミナーの開催、施設で参加のこと 施設パンフレットの配布
11. 施設情報収集実習	
12. 実習後セミナー	2年生との合同セミナー

身体運動文化論攷

表 12、表 13、表 14 に、現場体験実習前、実習中、実習後の学生の課題とその目的を確認するための実施例を示した。

表 12. 現場体験実習の実施例（実習前）

<p>①スキルトレーニング 提出（採点表）：実習後</p>	<p>目的：臨床実習に参加する学生に必要とされる技能と態度を体得すること。 設定された状況（課題）で、実習生としての適切な立ち振る舞いについて、ロールプレイでの学習を行います。2年生が1年生を指導し、実習スキル試験合格を目指します。試験は、教員が1年生の技術・態度を評価します。試験にて不可となった場合、追加課題及び再試験を行います。</p>
<p>②実習学生個人資料作成 配布：実習オリエンテーション 提出：事前訪問前席（コピー） 提出：事前訪問（原本）</p>	<p>目的：現場で必要となる文書作成技能を習得すること。 事前に実習担当教員の指導を受け、事前訪問前までに担当教員へコピーを提出すること。（原本は、事前訪問時に実習施設へ持参、実習指導者へ提出すること） 記入の際は、丁寧な字で適切な日本語を用いること。</p>
<p>③施設情報引き継ぎシート 配布：実習オリエンテーション 提出：プレゼンテーションスキル 技術試験初日（コピー） 提出：実習後（原本）</p>	<p>目的：必要な情報を主体的に収集する技能と態度を体得すること。 自分が実習を行う施設で、前年度実習を行った2年生学生にアポイントメントを取り、必要な情報を収集し、その内容を施設情報引き継ぎシートに記入し、コピーを教員へ提出すること。</p>
<p>④自己目標の設定 配布：実習オリエンテーション 提出：実習前セミナー（コピー） 提出：実習初日（コピー） 提出：実習後（原本）</p>	<p>目的：実習に対してより能動的かつ具体的に取り組むために、自己目標を設定すること。 自己目標達成報告書を用いて、自己目標を設定すること。まずチューター教員と相談の上、自己目標の方向性を決め、事前施設訪問時に実習で体験できる内容を確認し、自己目標を具体的に設定してください。その後、チューター教員のチェック（捺印）を受けた後、実習前セミナー時に実習担当教員へコピーを提出（原本は実習終了後、提出）すること。また実習初日、実習指導者へコピーを提出。</p>
<p>⑤実習施設への連絡 事前訪問 提出：実習学生個人資料（原本）を持参し、実習指導者へ提出すること</p>	<p>実習施設決定後、速やかに実習施設の方へ電話連絡し、事前訪問の日程を調整し決めること（日時・集合場所・交通機関）。同実習地に複数学生が行く場合には、必ず代表者を決め代表者が電話連絡をすること。電話連絡の時間帯は、実習地によって異なるが、必ず実習施設の实習指導者が居る時間帯に配慮し電話連絡すること。一般的には、昼休みAM12：30～AM13：00もしくは、PM16：30～PM17：00が良い。 事前訪問時の服装は、特に指定が無い限り、フォーマルスーツ等の服装で訪問すること。 事前訪問時には、以下の点を必ず確認すること</p> <ul style="list-style-type: none"> □ 実習内容・学生の役割・スケジュールの概要など □ 実習初日の集合時間、場所の確認。 □ 服装について確認。（服装・鞋等含む） 名札は、どのようなものがよいか（縫い付けが必要か） □ 持参するもの □ 昼食の確認：弁当持参・食堂の利用など □ 交通手段の確認：自動車、バイク、自転車の乗り入れは可能か？ □ その他：事前に学習しておくべきことはいくつか
<p>⑥プレゼンテーションスキル（実習施設事前調査シート） 配布：実習オリエンテーション 提出：プレゼンテーションスキル 技術試験初日（コピー） 提出：実習後（原本）</p>	<p>目的：事前に実習施設を調べ、経験できることを予測し、自己目標の設定の参考とともに、実習までに必要な知識・技能を整理・確認すること。また他学生に対して、わかりやすく伝えることができるスキルを体得すること。 事前訪問にて得られた情報、インターネット、書籍などの情報をまとめ、実習施設事前調査シートに記入し、プレゼンテーションスキル技術試験の初日に教員へ提出すること。 プレゼンテーションスキル試験では、実習施設別に、施設の概要、学びのポイント、必要なスキルなどについて10分間のプレゼンテーションを行うこと。パソコン（パワーポイント）でのプレゼン原則とする。試験当日、USBメモリーにてプレゼンのファイルを持参すること。</p>
<p>⑦健康診断・検便</p>	<p>実習を行う際、健康診断書・検便結果などが必要な施設がある。該当する施設で実習を行う学生は、各自、実習指導教員に準備に関する指示を受け、準備しておくこと。必要な検査結果がない場合、実習を行うことはできない。</p>
<p>⑧実習直前の連絡</p>	<p>実習開始1週間前までに、代表学生が実習指導者へ連絡を取り、あらかじめ実習のお願いと、連絡事項・変更点などがないか確認すること。</p>
<p>⑨実習前セミナー</p>	<p>目標：①情報をわかりやすく相手に伝えることができる ②学生の発表に対して積極的に質問できる 学生毎に実習の目標を発表（各1分程度）、その後、質疑応答。</p>

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

表 13. 現場体験実習の実施例（実習中）

①実習の内容・取り組み	実習指導者の指示のもと、現場業務の補助的役割（業務の手伝い）を担いながら、実習施設の役割、業務内容、対象者の状況などについて体験的に学習すること。この実習では、他の職種の業務を体験することを重視しているため、学生は積極的に幅広い業務に関わることができるよう努力すること。
②注意すべきこと	<ol style="list-style-type: none"> 1) 体調を整え、適度な緊張感をもって臨むこと。 2) 施設の規則、日課を厳守すること。特に学生が立入を認められていない区画、取り扱いを許されていない機器、対象者に行ってはいけないこと等がある場合があるので、事前に実習指導者より説明を受けること。 3) 複数の学生で実習を行う場合、学生同士でかたまり話をしたりしないこと。 4) 出勤、退社などの挨拶を忘れないこと。挨拶は、他者とのコミュニケーションの基本である。他者が心地よく思える挨拶を心がけ、積極的に行うこと。 5) 集合時間などを守る（遅刻厳禁）・提出物の期日は必ず守ること。 6) 決められた場所、時間外での飲食、喫煙は絶対にしないこと。 7) 服装、髪型（髪容）は、清潔感に配慮し、対象者、他スタッフ等に不快感を与えない容相を心がけること。アクセサリー（指輪、イヤリング等）は身につけないこと。 8) 休憩時間であっても、携帯ゲーム・携帯電話の操作をしないこと。 9) 昼食は、原則として持参し、昼休みに外出（買い物）にでないこと。
③服装	施設よりとくに指定が無い場合、ジャージ・Tシャツ・ポロシャツ等で行います。帽子、運動靴、上履き、汚れたときの着替え、名札（施設によっては貸し付け）などが必要な場合があるので、事前に実習指導者へ確認しておくこと。
④実習初日	<ol style="list-style-type: none"> 1) 自己目標達成報告書（コピー）を実習指導者へ提出し、各自の実習の目標を伝えること 2) 「実習指導報告書」を実習指導者へ提出すること。
⑤レポート・事務書類など	<p>学生が大学より課せられている課題は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 実習ノート（Daily Note）：実習を円滑にするため、実り多いものにするために、学生がその日に経験したことなどを記録するものである。内容には、実習の日程、実施内容、疑問や感想などが含まれる。実習ノートは、毎日、記入し、翌日の朝、ファイルに紐じて実習指導者に提出すること。 2) 出席簿：学生は、毎日、実習学生出席簿へ捺印すること。 3) レポート：内容は、実習で体験した内容とその考察、全体的な感想等である。実習終了日の朝、学生が実習指導者へレポート（コピー）を提出すること。（A4、2枚程度） 実習施設及び大学へ書類提出する際には以下の点に注意すること <ol style="list-style-type: none"> 1) ペンで丁寧に綺麗な字で書くこと。 2) 用紙は、汚さない、折り返しをつけない。 3) レポート提出の際は、「履修の手引き」のレポート表紙書き例に準じ、表紙を付けること。 4) 指導者氏名を記入する場合は、敬称を付けること。
⑥実習中の自己評価	実習2日目終了時に臨床実習自己評価表を用いて、実習への取り組みについて自己評価すること（中間の欄に記入）。可能であれば実習指導者からのフィードバックを受けることが望ましい。
⑦実習最終日	<ol style="list-style-type: none"> 1) 自己目標達成報告書：自己目標に対する達成状況について記入、実習指導者へ口頭で報告すること。 2) 臨床実習自己評価表を用いて自己評価を行うこと（最終欄に記入）。その内容を実習指導者へ確認して頂き、実習指導者に指導者評価欄への記入をお願いすること。（但し、指導者への記入は任意である） 3) 臨床実習指導者へ実習学生個人資料を返却して頂くこと。 4) 出席簿の確認を実習指導者へ依頼し、誤りが無ければ指導者評価欄への捺印して頂くこと。 5) 実習指導報告書を返却して頂くこと。もし最終日に受け取れない場合、郵便パックにて返送して頂くようお願いすること。

身体運動文化論叢

表 14. 現場体験実習の実施例（実習後）

①実習後セミナー	<p>目標：実習で習得した知識、技能、態度、その他の経験を発表し、実習の内容を再確認すること</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) グループ分けについて：2グループに分かれて発表します。 2) タイムスケジュール <ul style="list-style-type: none"> 9：00～オリエンテーション 9：10～13：00 発表 13：00～ 書類提出 3) 発表内容について <p>自己目標達成報告書の内容（5分程度）について発表し、その後、学生（昨年間施設で実習した2年生を中心に）からの質問、教員からの質問に答えます。なにを学ぶことができたのか、学生の言葉で具体的な体験の例を挙げながら発表してください。施設・設備の概要や実習内容の概要など発表する必要はありません。</p> 4) セミナーの評価 <p>担当教員が、各学生の発表・質問・態度について評価を行います。この評価は単位認定の一部となります。</p>
②実習後の資料整理	<p>実習終了後2週間以内に、以下の書類を規定の実習用ファイルに綴じ、実習担当教員へ提出すること。なおファイルの中身は、以下の順で綴じること（①が表紙にくるように）</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 実習学生個人資料 ② 自己目標達成報告書：実習終了後、実習成果を記入し、フェナのチェック（捺印）を受けた後、綴じること ③ 実習指導報告書 ④ 臨床自己評価表 ⑤ レポート ⑥ 実習ノート（5日分） ⑦ 施設情報引き継ぎシート ⑧ 実習施設事前調査シート ⑨ 実習スキルトレーニング課題・採点表 ⑩ 学生出席簿 ⑪ 欠席・早退・遅刻（願・届） ← 欠席などをあつた場合のみ
③実習後のお礼	<ol style="list-style-type: none"> 1) 実習終了時の御礼状 <p>実習終了後、お世話になった実習施設・実習指導者へ御礼の手紙（兼書）を書くこと。実習指導教員が取りまとめ役とするので、実習終了後、一週間以内に実習指導教員へ提出すること。宛先などを記入の上、提出のこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ①宛先は、施設名＋施設長（もしくは実習指導者）宛て ②差出人住所氏名は、 姫路市上大路7-2-1 姫路福祉大学医療保健学部作業療法学科 学生 ○○ ○○ <p>③兼書は、各自で購入すること。</p> 2) 年賀状について <p>年末、実習施設への年賀状を作成すること。</p>

地域貢献活動における学生の心構え・諸注意として、如何に掲げる項目において常に注意を促す指導がなされている。

1) オリエンテーション・セミナー

オリエンテーションでは、実習に関する説明を行いますので、実習を円滑に行うためにオリエンテーションの内容を各自確実に理解しておくことが求められます。また実習後のセミナーでは、実習での学習成果の発表があり、実習内容を他者にプレゼンテーションすることが求められますので、自分の経験を整理

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

しておくことが必要です。

2) 体調管理

実習前は、普段より体調に気をつけ万全の健康状態で実習に臨むこと。また歯科治療などは、事前に済ませておくこと。

3) 学習面での予習

実習指導者より事前学習を指示された場合、その内容について確実に学習し実習の臨むこと。また事前の指示がない場合でも、各自、実習で体験すると思われる内容に関連する事項について、知識、技術面での予習を怠らないこと。

4) 実習指導者（現場スタッフ）との関係

表 15 現場における報告・連絡・相談（ほうれんそう）の重要性について

ほうれんそう	報告・連絡・相談
現場における「報告」「連絡」「相談」を徹底することによって、組織の中で必要な情報がきちんと流れるようにすること。現場でのコミュニケーションの基本である。実習内容、やるべきことの確認、効率的に実習を進める事へのアドバイスや指示を得る事ができる。また自己中心的な考えの方向性をただして、チームワークを向上する事ができる。	
報告：指導者の指示に対するきちんとした報告を意味する	
連絡：指導者や関係者など間で交わされる情報交換・情報共有	
相談：迷いや困ったことがあったときに、指導者へ相談	

- ①実習指導者とは、指導者-学生として適切なコミュニケーションを心がけること。
- ②実習指導者に対してたえず積極的な態度で接すること。
- ③実習に関する相談は、実習指導者を中心に行うこと。
- ④実習指導者との間でトラブルが生じた場合、速やかに大学教員へ連絡すること。
- ⑤周囲から求められていることはないか、自分に出きることは何か ないか、たえず周囲に気を配ること。

表 15 に実習現場における報告、連絡、相談の重要性を伝える例を示した。

5) 対象者に対する配慮

①対象者の安全性を第一に考えること：対象者の安全性には常に配慮すること。セキュリティは、物理的な安全性の確保のみならず、対象者の情緒に対するセキュリティに気を配ることが重要である。すなわち対象者を不安にするような対応などをしていないか気をつけること。

②プライバシーの保護（個人情報の取り扱い）：対象者のプライバシーの取り扱いには、細心の注意が必要である。記録・カルテなどの個人的情報を見る場合は、必ず施設職員に承諾を得ること。実習中に知り得た個人的情報については、決して第三者（学生間を含む）に漏らさないこと。対象者について記述する場合、個人を特定できるような情報を記載することは厳禁である。個人を示す場合はイニシャルなどを用いず、A,BCさんというような表現を用いること。

6) 学生自身の個人情報の取り扱いについて

対象者と関係が構築されてくると、対象者より学生の個人情報（住所、電話番号等）を尋ねられることもある。後日、御礼の手紙を送りたいなどの好意な場合であっても、大学より学生の個人情報を伝えてはいけないと指導を受けていることを伝え、大学の連絡先を伝えること。

7) 緊急時の対応

万が一に備えて、緊急時の対応方法について実習指導者に確認しておくこと。事故等が起きた時には、対象者の保護を行うと共に速やかに周囲の職員へ知らせること。また小さなトラブルであっても、必ず実習指導者に報告すること。さらに実習指導者と相談の上、必要に応じて大学教員にも連絡をすること。

8) 専門職としての倫理

以下に、社団法人日本作業療法士協会が定める倫理綱領を示

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

す。

- ①作業療法士は、人々の健康を守るため、知識と良心を捧げる。
- ②作業療法士は、知識と技術に関して、つねに最高の水準を保つ。
- ③作業療法士は、個人の人権を尊重し、思想、信条、社会的地位等によって個人を差別することをしない。
- ④作業療法士は、職務上知り得た個人の秘密を守る。
- ⑤作業療法士は、必要な報告と記録の義務を守る。
- ⑥作業療法士は、他の職種の人々を尊敬し、協力しあう。
- ⑦作業療法士は、先人の功績を尊び、よき伝統を守る。
- ⑧作業療法士は、後輩の育成と教育水準の高揚に努める。
- ⑨作業療法士は、学術的研鑽及び人格の陶冶（とうや）をめざして相互に律しあう。
- ⑩作業療法士は、公共の福祉に寄与する。
- ⑪作業療法士は、不当な報酬を求めない。
- ⑫作業療法士は、法と人道にそむく行為をしない。

9) 出席・欠席・早退の場合の手続き

病欠の場合は、実習指導者に、実習時間開始30分以内に連絡し、指示を受け、後日、実習中の欠席・早退・遅刻届を実習指導者へ提出し、許可を得ること。病気などの理由にて早退する場合は、実習中の欠席・早退・遅刻届を実習指導者へ提出し、許可を得ること。欠席・早退・遅刻届は、実習終了後、大学へ提出すること。

地域現場体験実習における休日・欠席・遅刻・早退に関する規定

休日は各施設の方針に従うものとする。

地域現場体験実習における遅刻・早退・欠席は実習施設の特別な規定なき場合、以下の通りとする。

a. 遅刻は始業時より60分までをいう。

身体運動文化論攷

- b. 早退は終業前 60 分以内をいう。
- c. 60 分を超える遅刻・早退は欠席とする。
- d. 遅刻・早退は 3 回をもって欠席 1 回とする。

正当な理由を除いて、2 日以上欠席した場合は地域貢献活動・現場体験実習と認めないこととする。また、欠席が正当な理由と認められた場合については、補充実習を課すことがある。正当な理由とは、一・二親等の忌引き、病気（要診断書）、その他正当な理由として実習担当教員が認めた場合である。

地域貢献活動を実施する学生については、活動実施施設などの指導者に対し、指導概要を提示し、大学側と共通の認識を確認する努力がなされている。以下にその具体例を示す。

(実習指導者の先生方へのお願い)

- 1) 実習は、実習指導者の監督下で行ってください。
- 2) 実習を行う学生は、作業療法学科の 1 年生です。学生に関する情報は、学生が持参する「実習学生個人資料」をご参照下さい。なお学生は、実習時点において医療保健福祉に関する講義をほとんど履修していない状態ですので、専門的知識は十分ではありません。
- 3) 実習の具体的な内容は、業務の補助的役割（業務の手伝い）も持たせながら、実習施設の役割、業務内容、対象者の状況などについて体験的な学習を行わせて下さい。実習施設にボランティア体験プログラムのようなものがすでにあるようでしたら、その実施内容に準じて実施して頂いて結構です。学生は、大学で作業療法を学んでいる学生ですが、この実習では、他の職種の仕事を経験することを重視していますので、学生が配置された部門（職種）の業務を出来る範囲で学生が体験できるようお願い致します。
- 4) 学生が大学より課せられている課題は、以下の通りです。

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

- ①自己目標達成報告書：今回の実習での自己目標をたて、その達成状況について記述するものです。
 - ②レポート：内容は、実習で体験した内容とその考察、全体的な感想等です。実習終了日の朝、学生が実習指導者へレポート（コピー）を提出します。
 - ③実習ノート（Daily Note）：実習を円滑にすすめ、実り多いものにするために、学生がその日に経験したことなどを記録するものです。内容には次のようなことが含まれます。[実習の日程／内容／疑問や感想等] 実習ノートは、毎日、記載し、実習指導者に提出するように指導しています。お手数ですが実習ノート右上に確認の捺印をお願い致します。学生からの質問などに対しては、口頭でご返答頂ければ幸いです。
 - ④臨床実習自己評価表：自己評価表は、医療保健従事者及び学生として求められる行動様式（技能・態度）について、自己評価するものです。自己評価を通して、現場で求められている行動様式に気づき行動するように指導しています。学生は、実習2日目終了時に中間自己評価を行います。可能であれば、実習指導者からの意見を口頭でフィードバックして頂けると幸いです。
- 5) 実習指導者にお願いしたい事務的業務は、以下の通りです。
- ①出席簿：学生が自分で実習学生出席簿へ捺印しますので、実習最終日に、実習指導者がその内容を確認し、指導者の欄へ捺印をお願い致します。
 - ②実習終了時、実習指導報告書へ必要事項をご記入頂き学生に渡してください。その際、学生に対して簡単なコメント（学生の実習内容・態度、学生が提出したレポート、実習ノートの内容などについて）をお願い致します。（口頭で構いません）なお実習終了日に実習指導報告書を渡して頂くことが難しい

身体運動文化論攷

場合、学生が持参いたします郵便パックでご返送頂きますようお願い致します。

- ③臨床実習自己評価表（指導者評価記入欄）への記入は任意です。学生指導において必要であれば、実習指導者が学生の行動面について評価・ご記入頂き、学生へのフィードバックなどにお役立て頂ければ幸いです。
- ④「実習学生個人資料」は、学生の個人情報が含まれますので、実習終了日に学生へ返却してください。
- ⑤学生が提出したレポート（コピー）、自己目標達成報告書（コピー）は返却不要です。

6) 実習中の教員訪問について

学生に問題が生じた場合や実習指導者・担当教員での協議が必要となった等の場合、実習中に施設を訪問し、実習が円滑に行えるよう実習指導者と学生間の調整を行います。なにかございましたら、担当教員までご連絡ください。なお連絡先は、手引き表紙をご参照ください。

7) 実習の評価について

実習指導者より提出頂いた実習指導報告書、臨床実習自己評価表、出席状況、レポート・実習ノートの内容、実習後セミナーでの発表内容、実習前課題（実習スキル試験）等をもとに、単位認定を大学の担当教員が行います。

特に現場体験実習では、臨床実習自己評価表を用意し、学生と指導者の療法の評価を記入するようにしている。表 16 に、臨床実習自己評価表を示した。また、本学の趣旨を理解していただき学生を受け入れ指導していただいている施設を、表 17 に示した。

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

表 16. 臨床実習自己評価表（地域現場体験実習）

	項 目	自己評価記入欄		指導者評 価 （5段階）
		中間	最終	
I 医療従事者 としての行動 様式	①適正な緊張感と責任感をもつことができる。			
	②実習施設の業務規則・心得を理解し遵守することができる。			
	③約束の時間、服装を遵守する。			
	④遅刻・欠席の際には、必ず事前に連絡がとれる。			
	⑤自分自身の健康管理を行える。			
	⑥対象者の人格を尊重し敬意を払い接することができる。			
	⑦対象者・家族・職員に対し、きちんと挨拶ができる。			
	⑧対象者・家族・職員に対し、言葉遣いに留意できる。			
	⑨実習内容に応じた身だしなみや、清潔な身だしなみができる。			
	⑩現場の状況に気を配り、学生に求められている行動に気付き、（スタッフに確認した うえで）実行できる。			
	⑪予防接種を遵守できる。			
	⑫対象者の安全を第一に考え行動することができる。			
	⑬アクシデントの際に取るべき行動について事前に確認し、その場に関連した際には必 要な行動をとることができる。			
	⑭感染予防や衛生管理に留意した行動をとることができる。			
⑮指導者の業務などを配慮してアポイントをとることができる。				
II 学生としての 行動様式	①臨床の場から学ぶ姿勢をもつことができる。			
	②臨床（実習施設）のシステム、考え方を積極的に学ぶ。			
	③臨床での経験、わからないこと、困っていることを自覚し、質問することができる。			
	④自発的・積極的に質問できる。			
	⑤実習指導者に必要な支援を求めることができる。			
	⑥疑問や問題点の解決や新たな知識の獲得のために必要な行動を積極的にとること ができる。			
	⑦自分のもつ知識や考えに固執せず、指導者や職員による指示や指摘を柔軟に受 け止め、指導者の意見や価値観を理解するよう努力する。			
	⑧不足・失敗を自己分析し、そこから学ぶ姿勢をもつ。			
III 対象者との コミュニケーション・対人 技術	①対象者に対して適切な緊張感で接することができる。			
	②対象者の行動・気持ちを共感的に理解し、接することができる。			
	③対象者が必要としていることを感じ取り、支持的に接することができる。			
	④対象者からの（ポジティブ/ネガティブな）関わりに対して適切に対応できる。			
	⑤対象者の理解力に合わせてコミュニケーション手段を配慮することができる。			
	⑥場面に応じて、対象者に対する学生の態度を使い分けすることができる。			

身体運動文化論攷

表 17. 地域現場体験実習受け入れ施設

施設名	種類
ふれあいの郷養護老人ホーム	養護老人ホーム
齋田デイサービスセンター	デイサービスセンター(通所介護)
愛光園	身体障害者入所施設
陽光園	知的障害者通所
三愛園	身体障害者療養施設
ひかり館	精神障害者通所授産施設
香写障害者デイサービスセンター	障害福祉サービス事業(生活介護)
広畑障害者デイサービスセンター	障害福祉サービス事業(生活介護)
かしのきの里	知的障害者通所授産施設
姫路市総合福祉通園センター ルネス花北 成人部	知的障害者通所授産施設 知的障害者通所更生施設
かしのき園・かしのき分園 しいのみ園・しらさぎ園	身体障害者通所授産施設 地域活動支援センターⅡ型
在宅障害者デイサービスルーム	
姫路市総合福祉通園センター ルネス花北 児童部 白鳥園 つくし児童園 白鳥園 えぶりい	肢体不自由児通園施設 知的障害児通園施設
姫路市総合福祉通園センター ルネス花北 児童部 白鳥園 えぶりい	A型重症心身障害児(者)通園事業
さをり工房ゆう	障害福祉サービス事業(就労支援B型事業)

(4) 地域連携・貢献活動における取り組み

地域連携・貢献活動Ⅰは、医療・保健・福祉に関連する現場での地域連携・貢献活動を通して、能動的な学習行動を体得するとともに、身近な地域における医療・保健・福祉の課題を捉え作業療法士が求められていることを知ること、さらに多様な人間関係を構築する社会的スキルを磨くこと等が目的である。活動のフィールドは、本学で実施している地域連携・貢献活動への参加をはじめ、地域の医療保健機関、福祉施設、自治体・教育委員会、各種障がい者団体等での活動とする。

地域連携・貢献活動Ⅱ, Ⅲ, Ⅳの3つの科目は1年次生から4年次生までの認定科目である。学生が地域連携・貢献活動を概ね45時間を目標に実施した場合に、学科指定の単位認定申請書に地

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

地域連携・貢献活動証明書2を添付し申請した後に学科として単位認定する。学科としては、地域連携・貢献活動Ⅰの活動後も積極的に地域貢献活動を継続することを推奨している。表18に「地域連携・貢献活動の手引き」の導入部分を示した。

表 18. 地域連携・貢献活動の手引き

地域連携・貢献活動の手引き	
福徳福祉大学 医療保健学部 作業療法学科	
<p>① 地域連携・貢献活動Ⅰの概要</p> <p>医療・保健・福祉に関する場面で地域連携・貢献活動を通して、能動的な学習活動を体験するとともに、身近な地域における医療・保健・福祉の課題を作業療法士が求められていることを知ること、さらに多様な人間関係を構築する社会的スキルを培うこと等が目的である。活動のフィールドは、本学で実施している地域連携・貢献活動への参加をはじめ、地域の医療機関、福祉施設、自治体・教育委員会、各種民間団体等での活動とする。</p>	
<p>1. 単位認定について</p> <p>地域連携・貢献活動Ⅰは、1年次前期履修科目の作業療法専攻科目として位置づけ、前期Ⅰ単位を履修させるとする。なお、単位を申請する上で、専攻での活動は60時間となる。</p>	
<p>2. 履修意向の方向</p> <p>1) 学生が行うこと</p> <p>① 学生は、専攻が指定する施設等に連絡を取り、活動時間などの打ち合わせを行う。また、申請書、募集などは事前に提出すること。</p> <p>② 学生は、活動毎に地域連携・貢献活動証明書1を提出し提出する。</p> <p>③ 地域連携・貢献活動Ⅰの終了時に専攻セミナーを実施するので、自身が行ってきた活動についてまとめておくこと。</p> <p>2) 履修へのお願い</p> <p>学生が提出した地域連携・貢献活動証明書1に、活動内容および時間の記入をお願いします。</p>	
<p>② 地域連携・貢献活動Ⅱの概要</p> <p>以下に示す3つの科目は1年次から4年次までの履修科目である。専攻が地域連携・貢献活動を履修した時間満了の場合に、学科指定の単位認定申請書に地域連携・貢献活動証明書2を添付し申請した後に学科として単位認定する。学科としては、地域連携・貢献活動Ⅰの履修後活動を継続することを推奨している。なお、この科目は卒業2年次年度入学生から認定される。</p>	
<p>1. 地域連携・貢献活動Ⅱ</p> <p>地域連携・貢献活動Ⅱで体得したことをさらに深めるために、学生が主体的に地域連携・貢献活動を選択し活動する。継続的な活動への参加を通して、自分の行動パターンを客観的に振り返り、作業療法士として必要な問題解決技能、社会的技能・態度を体得する。</p>	
<p>2. 地域連携・貢献活動Ⅲ</p> <p>地域連携・貢献活動Ⅲで体得したことをさらに深めるために、学生が主体的に地域連携・貢献活動を選択し活動する。継続的な活動への参加を通して、自分の行動パターンを客観的に振り返り、作業療法士として必要な問題解決技能、社会的技能・態度を体得する。</p>	
<p>3. 地域連携・貢献活動Ⅳ</p> <p>地域連携・貢献活動Ⅳで体得したことをさらに深めるために、学生が主体的に地域連携・貢献活動を選択し活動する。継続的な活動への参加を通して、自分の行動パターンを客観的に振り返り、作業療法士として必要な問題解決技能、社会的技能・態度を体得する。</p>	
<p>1. 単位認定について</p> <p>地域連携・貢献活動Ⅱ科目は、1単位の履修科目として位置づけている。時間満了すると、専攻での活動は60時間となる。</p>	
<p>2. 履修意向の方向</p> <p>1) 学生が行うこと</p> <p>① 医療・福祉施設等単位履修以内に作業療法学科に履修科目の申請を行う。</p> <p>② 学生は、専攻が指定する施設等に連絡を取り、活動時間などの打ち合わせを行う。また、申請書、募集などは事前に提出すること。</p> <p>③ 学生は、活動毎に地域連携・貢献活動証明書2を提出し提出する。</p> <p>④ 地域連携・貢献活動Ⅱの終了時に、自身が行ってきた活動についての報告書を作成すること。</p> <p>⑤ 活動時間報告を提出しただけが、単位認定申請書を学科に提出する。なお、提出期限は活動の場合7月末日、自習の場合1月末日とする。それ以降は認められない。</p> <p>2) 履修へのお願い</p> <p>学生が提出した地域連携・貢献活動証明書2に、活動内容および時間の記入をお願いします。</p>	
<p>③ 履修認定の申請</p> <p>学科にて履修に該当する履修に加入しております。</p>	
<p>印刷・配布資料等</p> <p>医療保健学部 作業療法学科 福徳福祉大学 小冊子等</p>	
<p>【電話・FAX（直）】079-228-9022（作業療法学科助産部）</p>	

地域連携・貢献活動Ⅰで体得したことをさらに深めるために、学生が主体的に地域連携・貢献活動を選択し活動する。継続的な活動への参加を通して、自分の行動パターンを客観的に振り返り、作業療法士として必要な問題解決技能、社会的技能・態度を体得

することを目的としている。

地域連携・貢献活動Ⅰは、作業療法学科における初年次の必修科目とし、地域連携・貢献活動Ⅱ・Ⅲ・Ⅳについては、選択科目として設置することになっている。単位化することの是非は十分に議論されたが、地域貢献活動の機会をつくることが重要であるとの考えに基づいて、学生には積極的に参加することを促している。活動を時間で計算することが無いように、次年度も次の学生が同様の地域貢献活動を継続すること伝え、受け入れ施設に迷惑をかけることのないよう指導がなされている。また、次年度参加する学生の指導も経験した学生が担当することとしている。

Ⅳ. 医療・保健・福祉分野における地域貢献活動の成果

(1) 臨床技術実習Ⅰ・Ⅱおよび現場体験実習における地域貢献活動

姫路市内の福祉グループである社会福祉法人愛光社会福祉事業協会が実施する太陽公園峰相山鶏足寺火祭り支援の依頼を受け、作業療法学科の多くの学生が介助や売店の運営等に関わることが可能となった。地域貢献活動を通じて学生は多くのことを学んでいる。

社会福祉法 愛光社会福祉事業協会の運営する太陽公園は、障がい者自ら経営する「就労の場」を設置することを目的として設置された施設であるが、園内に障がい者支援施設などの多くの施設を運営しており、作業療法士による機能訓練、生活基本動作訓練、創作活動、スヌーズレン療法等の実施が積極的に実施されており、学生たちは大学で学ぶ以外に実際の現場において多くの事を学ぶ機会を得ることが出来る。

図5にその具体的活動状況を示した。

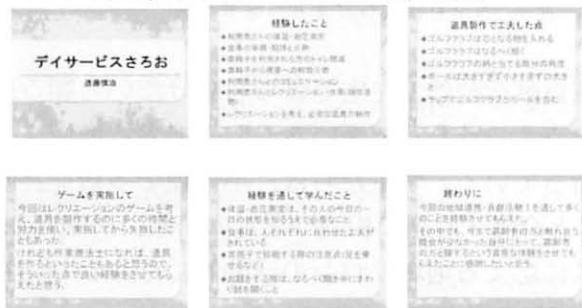


図 5. 太陽福祉グループ火祭りボランティア

終了後も引き続き定期的に活動が続けたいと希望する学生が中心となり、継続的に地域貢献が実践出来ている状況にある。大学内に学生たちの情報交換が出来るミーティングルームの設置を企画中である。

(2) 地域連携・貢献活動における成果

図 6. デイサービスにおける学生報告



地域連携を依頼している多くの施設における活動に学生が参加している。次年度入学して来る学生に、より良く情報が伝わる

るように地域貢献活動経験学生による資料を作成中である。

図 6 に、デイサービス施設において活動を継続している学生の報告例を示した。

身体運動文化論攷

高齢者とコミュニケーションをとる機会の少ない学生が、工夫をして体験を重ねる努力を認めることができお互いに報告し理解を深める機会を増やす努力をする。このような経験を蓄積する機会を多く持つことが、地域貢献活動に期待される部分でもある。

図7に、小規模デイサービスであるNPO法人において活動を継続している学生の報告資料を示した。

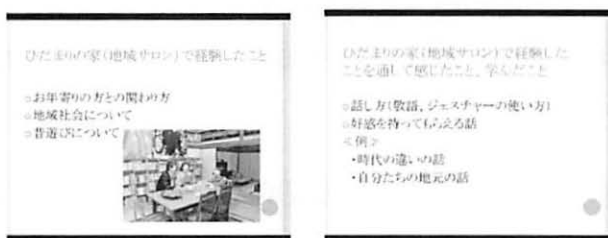


図7. NPO法人ひだまりの家報告例

地域連携・地域貢献活動は、在宅で暮らし続けたいと願う地域の高齢者や家族を支え、安心して老いることのできる地域作りと深くかかわりを持っている。学生たちは、小規模で多機能、家庭的なデイサービスと介護・看護の相談や福祉の研修、研究に加え、地域の福祉ニーズに応える地域サロンの活動等にかかわり、社会及び地域福祉への寄与を学ぶ機会を得ている。

NPO法人ひだまりの家理事長の小嶋明氏は、障がい者スポーツを代表する指導者でもあり、障害者スポーツの領域においても学生の指導を依頼している。図8に車いすバスケットボールのボランティアに関わっている学生の報告例を示した。



図 8. 車いすバスケットボールチーム Web 紹介

チーム Web にかかわった学生が中心となり、学内における車いすバスケットボールの体験講習会を開催することにも協力を得ることが出来るようになり、図 9 に示すように、学生の地域貢献を理解していただける状況が学内に反映できるようにもなっている。



図 9. 車いすバスケットボール体験会

図 10 に示すように、医療保健学部では機会があれば、世界的な車いすランナーである廣道純氏の講演会を開催し学生に障がい者スポーツに対する取り組みを実施しているが、医療保健学部の学生だけではなく、他学部の学生も参加する講習会を開催することができたのは、今後の活動に大きな幅が出来たと期待している。

身体運動文化論攷

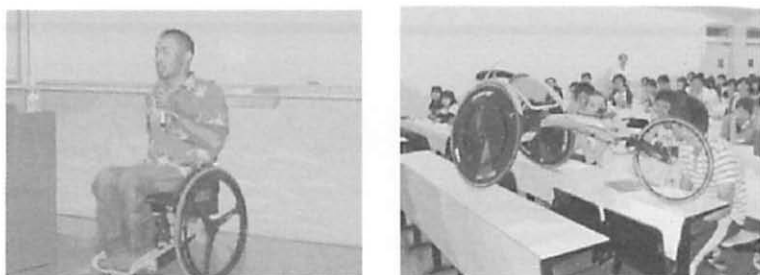


図 10. プロ車いすランナー廣道純氏講演会

(3) 活動内容に関する定期的セミナーの開催

学内において、学生による不定期なセミナーの開催は実施され、学生による運営が可能となっている。今後、実習報告会などの定期的に地域貢献に関するセミナー・研究会を開催し、学生の意識を向上させる計画を立てている状況である。

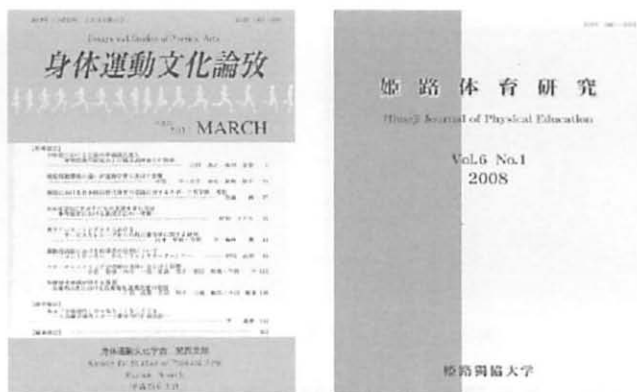


図 11. 各種学会・セミナーの開催および参加

また、各領域において活動している卒業生を招聘しての研究会の開催や、作業療法学会などの研究会への積極的参加を促している。また、体育・スポーツ領域においては、「姫路体育研究会」が発足、研究誌として「姫路体育研究」が発行され、体育・スポー

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

ツを基盤とした地域貢献活動は定期的に活動を持続している。さらに、身体運動文化学会関西支部学会を発足し、地域貢献領域の研究を実践できるようにしている。この領域においては、卒業後関西大学大学院文学研究科総合人文学専攻身体文化専修に進学した学生が、「地域スポーツボランティアとしての取り組みに関する研究」について調査を継続している。(図 11 参照)

学生を積極的にスポーツボランティア活動に参加させることにより、アダプテッド・スポーツ領域の知識と実践力を習得する状況を提供している。特に、障がい者スポーツサミット、兵庫県障がい者スポーツ陸上、兵庫ノーマライゼーション陸上スポーツ大会などは、学生の意識を喚起させる非常によいテーマと提供しており、アダプテッドスポーツの指導者として学生が地域貢献できるように指導体制を構築している。

(4) 「ユニバーサルスポーツネット」AM」「スポーツプラネット姫路」及びコミュニティマガジン「Cha-Spo チャスポ」の編集・発行

姫路およびその近郊で活動しているスポーツ関連団体と障がい者支援のためのスポーツ関連団体を結び、「ともに生きる街づくり」を目指すために「ユニバーサルスポーツネット」AM」が結成されている。

参加しているのは、NPO 法人「スポーツクラブ・エストレラ」、車いすバスケットボールの「チームweb」、「スペシャルオリピックス日本・兵庫姫路プログラム」、「兵庫県ゴールボール協会」、「ローリングバレー」、などが加入しており、それぞれの団体からスタッフが集まり運営をしている。

さらに、スポーツを通じて、地域の活性化に一役買いたい、またスポーツをする人だけでなく、スポーツに関わる多くの人たち

身体運動文化論攷

を、さまざまな角度から応援したいという団体や個人が集まり、情報誌の発行、イベントの主催などを行うスポーツプラネット姫路を立ち上げ、コミュニティマガジンの編集・発行に学生が関わることになっている。(図 12 参照)

The image shows a screenshot of the Cha-Spo website. On the left, there is a navigation menu with the following items: "スポーツプラネット雑誌とは?", "チャスポの経緯", "イベント情報", "Cha-spo オンライン", "ご挨拶", "お問い合わせ", and "プロフィール". Below the menu is a section titled "cha-spo イベントカレンダー" with a calendar icon. Further down, there is a section titled "Cha-spo 2013" with a photo of a person. At the bottom left, there is contact information for "Cha-spo" including an address, phone number, and email. The main content area on the right has a header "Cha-spo" and a sub-header "「Cha-spo」は「スポーツプラネット雑誌」が発行する「スポーツコミュニティマガジン」です。". Below this, there are several paragraphs of text and a small image of a magazine cover. The text describes the magazine's purpose and how it is published. At the bottom of the page, there is a footer with the text "2013 © sportsプラネット姫路/Cha-spo".

図 12. コミュニティマガジンの編集・発行

また、ユニバーサルスポーツデーを定期的に行い、多くの学生が実行委員として運営に関わっている。2013年度は姫路獨協大学作業療学科の学生が、実行委員長と副委員長の大役を果たすことができた。(図 13、図 14 参照)



図 13. ユニバーサルスポーツデーの開催

ユニバーサルスポーツデー 2012

In ひめじ・まどがた 報告書

日時：平成24年11月5日(日)

場所：ひめじ市市民体育館

参加者：100名

イベント内容：以下のスポーツ種目を体験しました。

①バドミントン ②卓球

③テニス

④柔道 ⑤空手道

⑥太極拳 ⑦健康講座

⑧お茶会



健康講座(右側)とお茶会(左側)



①バドミントン

②卓球

③テニス



④健康講座



⑤柔道・空手道



⑦太極拳

会場には由緒の浅い池もあり、観山の方が整頓してくれました。

ご支援・ご協力いただきました皆様、本当にありがとうございました。

作成者：施設管理課 特別企画

図 14. ユニバーサルスポーツデーの運営

(5) 公民館活動への学生参加の可能性について

姫路市には市立公民館が65館あり、各地域の特色を活かした公民館活動が実施されている。それぞれの公民館において、特色のある「教養講座」、「地域講座」、「文化講座」が実施されており、地域貢献活動として学生がかかわる領域はどのようなものがある

のか検討することとした。

今回、大学に比較的近い地域に位置している「城乾公民館」と「城の西公民館」に協力を依頼し、学生の地域貢献活動領域拡大への評価も依頼した。

公民館での地域貢献活動は初めてということもあり、現行最も困っていることへの対応に学生が応じることが出来ないか相談した結果、敷地内の雑草を何とかできないかとのことであった。気がつくごとに担当者が草抜きを実施しているが、十分に手が回らないのが実情であるとのことであった。しかし、炎天下で学生にとっては日頃実施していない作業であり、依頼するのは気が引けるとのことであった。

学生には、作業内容を説明し定期的に公民館活動に参加する体制を組むことが出来て感謝している。特に、精神科領域で重視されている園芸療法には、園芸作業が不可欠であり、まさに地域貢献活動において学生は実践力を身につける機会を提供していただいていることとなった。

作業療法士が取り組む療法の中には、芸術療法（アートセラピー）という領域がある。芸術療法は、心理学に関わる治療法の一分野としてすでに日本でも幅広く実施されており、絵画療法、コラージュ療法、箱庭療法といった心理療法として長く使用されている技法はよく知られている。さらに、音楽療法、ダンス療法といった芸術の実践から発展した技法や、園芸療法のように園芸学の発展型として実践されているものもある。

前述の「野外教育文化論」の中でも述べているが、自然環境と深く関わって生活している地域を取り上げ、自然環境に関係する生活、産業、伝統芸能、民話等のテーマを中心にフィールドワークを取り入れた教室外での取り組みは、大学教育の最も弱い部分でもある。「地域や自然の環境とふれあう」、「地域や自然の環境を

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

知る」、「地域や自然の環境へ行動する」このような働きかけを、積極的に実践することができる機会を与えていただくことが出来て感謝している。

草花を愛でる、作物を育てる、収穫する、音楽を聞く、演奏する、描画する、歌う、踊るなどは、作業療法士として身につけておかなければならない基本的領域でもある。幸いにも、指導をお願いした公民館の館長および指導員の方は、芸術、身体運動文化、養護教育領域に造詣の深い方々であり、学生は多くのことを学ぶことが出来た。今後は、ダンスセラピーなども取り入れ身体論の観点から芸術学と医療とに携わる領域の展開を試みたいと考えている。

実際に、研究室で卒業論文に取り組んでいる学生のテーマとして、遊戯療法、陶芸療法、音楽療法などに興味を示す学生がおり、実践的な取り組みを指導している。今後は、公民館の行事に積極的にかかわり、高齢者の芸術療法として注目されている俳句療法などに興味を示す学生の出現を期待したい。(図 15、図 16 参照)



図 15. 公民館における地域貢献活動報告例

また、今回依頼をいただいた、公民館の図書資料のデータベース化について、経済情報学部の学生支援の一環として協力して取り組みたいとの希望が出ている。

阪神淡路大震災、東北震災などの自然災害を受け、学生自身の生活する周辺環境の把握、発生後の救援活動の効果的な取り組み等が、危機管理を含む領域において取り組まなければならない時代となってきている。いきなり大災害のボランティア活動を要請しても、活動レベルは期待できないため、教育現場においては、まず学生自身が生活する環境および学ぶ環境周辺の地域を把握し、何を提供することが出来るのかを日常レベルで経験を蓄積する必要がある。まずは、地域における貢献活動を積極的に取り入れる必要がある。

今回、助言をいただいた関西大学の取り組みは、学生を中心としたロータアクトクラブ活動であるライラ（Rotary Youth Leadership Awards）や防災教育の面において学生ボランティアの関わりを考える大きな機会となった。領域は異なるが、大いに参考にして今後の取り組みを考えたい。

VII. まとめ

姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科は、学部設立時より単に作業療法士の育成だけではなく、健康科学という領域においても地域貢献できる人材の育成を目指している。そのため、初年次生より姫路における医療・保健・福祉関連施設における活動に積極的に学生を参加させる授業形態を取り入れ、学生の地域貢献活動の実践を試みている。

これまでに実施してきた地域連携・貢献活動の領域は、地域の医療保健機関、福祉施設、自治体・教育委員会、各種障がい者団体等での活動を中心として、地域の祭りや障がい者スポーツへの参加も含め、学生の活動を活性化する取り組みを多く実践してきた。

学生は医療・保健・福祉に関連する現場での地域連携・貢献活動

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

を通して、能動的な学習行動を体得するとともに、身近な地域における医療・保健・福祉の課題を捉え、さらに多様な人間関係を構築する社会的スキルを経験することができるが、学年が進行するにつれ、地域貢献活動という領域から離れてしまう傾向にあることも次の課題として問題提起されてきている。一方、受け入れる側としても毎回未熟な状態で学生を受け入れ育て上げた経験を蓄積した能力ある学生が、大学における長期実習等で活動現場を離れることとなり、再度新しい学生を育てる努力に専念しなければならない矛盾を再考する状況にある。

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくりの取り組みにより、次のような成果を認めることができた。

1. 「入学前教育」、「地域政策と地域貢献」、「野外教育文化論」、「スポーツマネジメント」、「アダプテッド・スポーツ」などの科目を、地域貢献活動という考えのもとに、学生に対し明確な方向づけを示すことが可能となった。
2. 医療保健学部学生の地域貢献活動の取り組みとして、「臨床技術実習Ⅰ・Ⅱ」、「現場体験実習」、「地域連携・貢献活動」などの科目を中心として、学生の地域貢献活動に継続性を持たせることが可能となった。
3. 地域の福祉関連施設、NPO法人、スポーツボランティア団体などの協力を得て、コミュニティマガジンの編集・発行、各種地域貢献活動に参加する機会を得ることができた。
4. 公民館活動への学生参加の可能性について、多くの示唆を得ることができた。特に環境整備に関する領域については、学生の積極的な参加を考えている。また、経済情報学部も学生の地域貢献の一環として、情報関連の手伝いおよび留学生の異文化交流などの申し出が出てきた。

身体運動文化論攷

5. 地域貢献活動室を設立することができた。(医療保健学部作業療法学科の学生を中心に、ローターアクトクラブを立ち上げていたが、親睦と奉仕活動の理解が学生には難しく、活動が停滞していたため、地域貢献活動室を併設し、全学的取り組みができる体制を構築し、活動の拠点を明確にした。)

参考文献

- 1) 安藤淑子：大学の地域貢献における学生ボランティア活動の評価と位置付け，山梨国際研究 2, 7-15, 2007.
- 2) 大西史晃ら：学生のボランティア活動による地域貢献，びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第 7 号, 105-115, 2010.
- 3) 松岡秀紀，大学と地域との地学連携におけるまちづくりの一考察，同志社政策科学研究 9, 77-99, 2007.
- 4) 小松隆二：大学地域論，論創社，5-44, 2006.
- 5) 小此木啓吾：モラトリアム人間の時代，中公文庫，1978 年.
- 6) 獨協学園資料センター：THE HISTORY OF DOKKYO, 23-24, 獨協学園, 2007.
- 7) 新井孝重：獨協学園における周年史編纂と資料センターの役割，53-57, 大学史活動第 31 集，明治大学資料センター，2010.
- 8) 雪山伸一：天野貞祐と戦後教育改革，獨協学園資料センター研究年報第 4 号, 2-33, 2012.
- 9) 古屋顕一：自然教育の展開これからの野外教育のあり方について，筑波大学大学院体育研究科修士論文抄録，53-56, 1986 年.
- 10) 小澤紀美子：こども環境学会の震災復興支援活動，保健の科学 Vol.54, 835-839, 2012.

学生を中心とした医療・保健・福祉分野における継続的な地域貢献活動の基盤づくり

謝辞

本研究を進めるにあたり、地域貢献活動に関する学生の受け入れを受諾していただいた姫路市の各団体および各施設の皆様に深謝致します。

本研究は、平成 24 年度姫路市政策研究助成を受けて実施されました。

姫路市長石見利勝様、研究の進め方等についてご助言をいただいた姫路市市長公室の皆様に深謝致します